No.158 ランゲルハンス細胞組織球症

熊本赤十字病院 山下　祐

① 症例：50代　女性

② 既往歴：胃MALTリンパ腫

③ 臨床経過：右鼠径リンパ節腫大にて紹介受診その後、経過観察中に左鼠径部腫大し、鼠径部膿瘍ドレナージ、周囲リンパ節生検を施行。

④ 検体、材料：左鼠径リンパ節　捺印細胞診

⑤ 細胞診所見：成熟リンパ球と多核細胞(好中球、好酸球)を背景に、単核から二核のやや大型の細胞が多数出現していた。大型細胞の核縁は薄く、クロマチンは微細、細胞質は豊富でライトグリーンに淡染しており、一部、核の切れ込み、皺を認めた。

⑥ 組織所見：好酸性で豊富な胞体を有する異型細胞の密な増殖がみられ、免疫染色にて腫瘍細胞はCD1a、CD68、S100で陽性を示し、Langerhans cell histiocytosis と診断された。また、細胞異型があることよりLangerhans sarcomaの可能性も否定できなかった。

⑦ 鑑別点：

結核性リンパ節炎−壊死背景に類上皮細胞、ラングハンス巨細胞を認める。

癌の転移−壊死背景に結合性のある異型細胞が出現。

びまん性大細胞型B細胞リンパ腫−大型の異型リンパ球が単調に出現。

ホジキンリンパ腫−Hodgikin細胞やReed-sternberg細胞を認める。

血管免疫芽球性T細胞リンパ腫−多彩な細胞増生を背景に樹枝状血管、淡明細胞が出現。

未分化大細胞リンパ腫−核形不整が著明で、腎形、馬蹄形の核が出現。

参考文献

WHO Classification of Tumours of Haematopoietic and Lymphoid Tissues

細胞診ガイドライン4 呼吸器・胸腺・体腔液・リンパ節